

日本初の近代的国語辞書『言海』と大槻文彦

国語の統一は一国の独立の基礎

宮城県図書館は、日本初の近代的国語辞書『言海(げんかい)』を著した大槻文彦(おおつき・ふみひこ、1847~1928年)の自筆原稿などを「大槻文庫」として所蔵している。文彦は宮城県書籍館(しょじやくかん)【現在の宮城県図書館】の第8代館長もつとめている。

新しい国づくりを進める明治政府にとって、国語の統一は急務だった。この難事業を、文彦は17年をかけ、ただひとりで成し遂げた。『言海』刊行までの文彦の足跡をたどる。

写真左
『言海』の自筆稿本
(宮城県図書館蔵)
中央に「……快快又快
其快言ヒ難シ……」と
記されている。原稿完
成の喜びとそれまで
の苦労が伝わってくる。

明治政府と国語辞書

明治初年、政府は府県別の年報と地誌、体系的なわが国の歴史や百科事典、そして国語辞書の編纂(へんさん)を計画した。それは、戊辰(ぼしん)戦争後の新しい国家体制を確立し、西欧諸国に対抗しうる国家の文化的自立をはかるためであった。

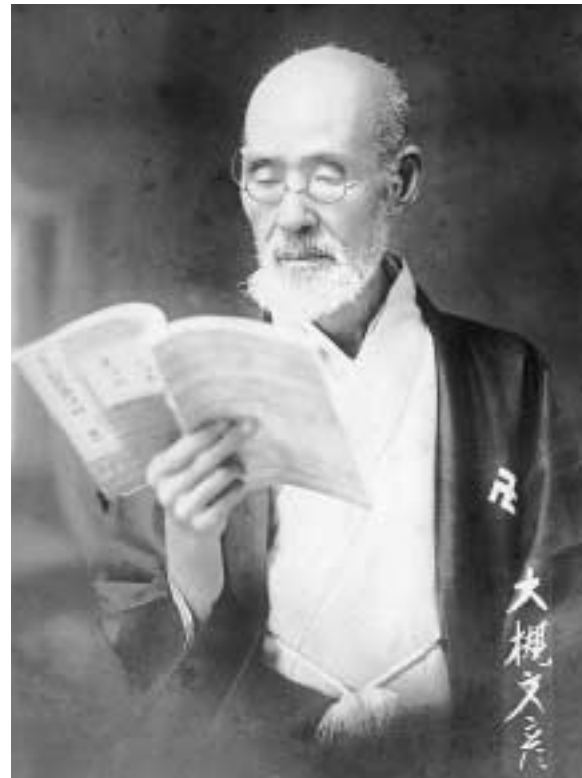
そのうちのひとつ国語辞書は、その完成まで幾多の困難を乗り越えなければならなかった。1869年(明治2)に洋学者柳川春三(やながわ・しゅんさん)は近代的国語辞書の必要性を建白した。これを受けて、政府は当時の有力な国学者たちを集め、官撰(かんせん)の辞書『語彙(ごい)』編纂に取りかかったが、完成には至らなかった。複数の編纂者の意見調整の困難さなどがあげられているが、そもそもは国学者のみの知識や経験だけでは、俗語や日常語をも収録する普通語辞書の編纂は無理があったことであるとされている。

このような事情を踏まえて、文部大書記官西村茂樹は、大槻文彦に白羽の矢を立てたのであった。

学問の系 大槻家

大槻文彦は、仙台領一関(現・岩手県一関市)出身の日本有数の学問の系、大槻家の一員である。祖父玄澤(げんたく)は蘭学者で海外の研究にも熱心な人であった。彼は西欧のことを知るにつれて、その時代の人々には実感することが難しかった「日本国」という観念を持つようになった。

この観念は、息子の磐溪(ばんけい)から、戊辰戦争をくぐり抜け、明治維新を体験した孫文彦へと伝えられていった。西欧を認めながら、それとは異なったものとして「日本」を発見し、その自立に尽くすこと——そこに文彦の出発点があった。



大槻文彦(おおつき・ふみひこ)
1847年(弘化4)~1928年(昭和3)。国語学者。仙台領一関(現・岩手県一関市)出身の学者の家系大槻家に生まれる。祖父は蘭学階梯(らんがくかいてい)の著者・大槻玄澤、父磐溪は漢学者。

文彦は『日本文法論』の中で次のように記している。

「方今(ほうこん)我国ノ文学ニ就(つ)キテ最大の欠典(欠点)トスルハ日本文典ノ全備セル者ナキナリ是(これ)ナキハ独(ひとり)我国文学ノ基礎立タザルノミナラズ外国ニ対スルモ真ニ外聞悪シキ事ナラズヤ」

これを書く8ヶ月前の1875年(明治8)2月、文彦は西村から国の方針として、やがて『言海』と名づけられ